

8109 「あなたのお子さん、おいくつ？」

「あなたのお子さん、おいくつ？」

「四歳です。」

「まあ！ いちばんかわいい年ごろね。だってサロペット・エージですもの。」

ついこの前まで、人からそう言われ、にんまりとして息子の丸いおなかと短足を、ほんとかわいいな、とながめたものです。ところが六歳から七歳になる間に、すっかりおなかは引っ込み、足がひよろながくなり、サロペットを着せると、まるでかかしみたい。おまけに言うことまで憎らしくなる。

『ミセス5月号』

* サロペット (salopette) はフランス語、英語の rompers のこと。

[許容訳例]

“How old is your son?”

“He is four years old.”

“Well! The sweetest time of life, isn’t it--the ‘romper age.’”

Until quite recently I often heard this kind of thing, and would look smugly at his plump belly and short legs, thinking they really were pretty. But between the ages of six and seven, his belly has become quite flat and his legs lanky, and in rompers he is like a scarecrow. Besides, he has come to say provoking things.

[翻訳例]

“How old is your little boy?”

“Four.”

“Well now! That’s just the cutest age--I mean, it’s the time for rompers, isn’t it?”

Only recently, people would still say such things to me, and I would gaze smugly at his plump belly and short legs, thinking to myself that he really *was* rather sweet. However, somewhere between the ages of six and seven his belly went quite flat and his legs became lanky, so that now rompers make him look just like a scarecrow. What’s more, even the things he says are somehow provoking.

■ 「あなたのお子さん、おいくつ？」 (8109)

★ 「あなたのお子さん」は後を読むと男の子であることがわかりますから your son でいいのですが、このような場合には your little boy と言うことが多いと思います。

★ 「(あなたのお子さん,) おいくつ？」は How old is your little boy [your son]? でしょう。

■ 「四歳です。」 (8109)

★ 「四歳です」と丁寧に「です」が付いていますが、これは日本語としては普通です。普通という点から言うと、英語では Four. です。中学校で I am Tom Brown. I am a boy. You are

a girl.と英語を習ってきた人には、何だかぶっきらぼうに聞こえるかもしれませんが、そうではありません。

文法的に正しい文も言語習慣的には必ずしも正しくない場合があります。たとえば、天皇陛下が何か指さして「これは何ですか？」と尋ねたら、「バラでございます」（これは三上章の言う「主格補語」です）と丁寧に答えるでしょう。では、イギリスでエリザベス女王が“What is this?”と尋ねたら、

“A rose, your Majesty.”

“It's a rose, your Majesty.”

のどちらでしょうか。私は、昔、日本語では主語を省くけれど英語では主語は省かないのが丁寧で“It's a rose, your Majesty.”と答えるのが正しい。“A rose, your Majesty.”はぶっきらぼうで失礼であると教えられました。実際は逆です。

日本語でも、たとえば、お母さんが小さな娘に果物かごの中もものを指さして「リンゴ、ミカン、バナナ、・・・」と教えたとします。いくど教えても娘は覚えません。お母さんが台所で仕事をしていると、娘はまたリンゴを指さして「これは？」と聞きました、お母さんは「(お馬鹿さんね) それはリンゴよ！」と代名詞を使います。実は、この言葉の強さは英語でも同じです。先生が教壇から“What is this?”とペンを持って生徒達に尋ねているとき、トムは後ろの席のスーザンとおしゃべりをしています。先生は「トム、これなんだ、言ってごらん」と言いますと、トムは先生の方を向いて「それはペンにきまってらあ(It's a pen.)」と答えます。したがって、女王に“A rose, your Majesty.”(バラに決まっていますよ)と答えるのは失礼なのです。「バラでございます」に相当する英語は“A rose, your Majesty.”です。よく適切に相づちが打てるようになったら英語も本物だと言われますが、代名詞が適切に使えるようになったら英語の学習も終わりに近づいています。

したがって「四歳です」を He is four years old.と言うと、非常にかたくて、しかもくどいのです。絶対にこういう言い方はしないと断言していいと思います。

■「まあ！ いちばんかわいい年ごろね。」(8109)

★「まあ！」は Well!が一番いいと思います。イントネーションによってニュアンスが変わりますが、驚きも表すので、ここではぴったりです。今の状態を強調して Well now!も使えます。

◆指示代名詞(this; that)と既知・了解代名詞 it と付加疑問

★「いちばんかわいい年ごろね」は That's the sweetest age, isn't it?とか(That's)The sweetest time of life, isn't it? とか That's just the cutest age.でしょう。辞書で「かわいい」を引くと lovely が出てきます。これは女の子に使えます。pretty も女の子です。charming なら男の子にも使えます。ところで、主語は指示代名詞の that です。この that は「すでに指摘されていたり、または状況判断できる距離的・心理的に自分から離れている者・物・事(の全体)を指す」場合です。ですから、たとえば、有名なハムレットのセリフ“To be or not to be. That is the question.”も前の文全体を受けて that です。が、仮にこの文を付加疑問にすると、た

った今述べた That is the question.はすでに既知・了解情報なので“To be or not to be. That is the question, isn’t it?”（生きるか死ぬか、それが問題ですよ）です。このような例はあまりなく、江川泰一郎氏の『英文法解説』でも“This is the last ferry, is it?（これが最後のフェリーですよ）”の一例を載せているだけです。

■「だってサロペット・エージですもの。」(8109)

★「だって」は because では弱いと思われまゝす。一番近いのはI mean でしょう。これですと、今自分が言ったことの説明にもなるし、意味を強調することにもなります。特に、この場面のような場合に女の人は使うのではないかと思います。

★「サロペット・エージ」はフランス語(salopette)と英語(age)を組み合わせた日本語です。salopette は胸当て付きのパンツでオーバーオール（違いは背中に布があるか、ひもだけで結ぶか、など）に似ていて、ファッションとしては大人も着るので、そのまま英訳してもほとんど通じないでしょう。幼児用の着る物としては rompers とすればイメージが沸くと思います。それでも romper age というような言い方は英語ではしないので、ここは「サロペットの似合う年頃」という意味に解釈して the time[age] for rompers とするか、特殊な使い方であることを示す印として引用符で囲って the “romper age”とするしかないでしょう。なお、time や age には定冠詞です。不定冠詞にすると、そういう時が他にもあることになります。たとえば、He is at a difficult age.という、場合によっては子供の反抗期にも使えるし、年寄りの気むずかしい人の場合にも使えることにもなるのです。

★「(だって・・・) ですもの。」にこだわる必要はないのですが、「・・・ですもの」に自己納得のニュアンスを感じた場合、つまり、「(だって・・・) ですものね。」の感じなら付加疑問にして isn’t it?を加えるといいと思います。

■ついこの前まで、人からそう言われ、にんまりとして息子の丸いおなかと短足を、ほんとかわいいな、とながめたものです。(8109)

★「ついこの前まで」は until quite recently でもいいですが、「つい・・・」は only を使うと表すことが出来ます。たとえば、「つい先だって」は only the other day と言えます。ですから、ここでも only recently が使えますが、「まで」があるので、たとえば、Only recently people would still say…（ついこの前まで人々は・・・と言っていた）のように still を入れるといいです。

★「人からそういわれた」は I often heard this kind of thing としてもいいのですが、文末の「ものです」はすぐ前の「ながめた」だけでなく「そういわれた」にも懸かっていると考えることもできます。したがって、people would say such things to me とすることも出来ます。なお、ここでは would の代わりに used to は使えません。「昔は・・・」という感じになります。それから、「人からそういわれた」ですが、英語では受動態は特殊で受動態にしなければ伝えられない場合の他には使いません。たとえば、「この時計をジョージ叔父さんにもらった」は Uncle George gave me this watch.です。ですから I would often be said[told] so などは駄目です。特に tell は inform という意味ですから、何か事実を伝える

場合に使う動詞です。

★「にんまりとして」は、辞書には *smilingly* が出ていますが、これは「にこにこして」です。また *chucklingly* は声を出して笑うのですから使えません。ここで一番いいのは *smugly* ではないかと思われます。この言葉には「満足そうな笑い方」と「気味の悪い笑い方」という場合とがあって複雑（たとえば、取り澄まして・悦に入って・いい気になって・気取って、など）なのですが、ここのような場面で使うとちょっとユーモラスな感じになります。自分の子供を褒められた親が「その通りだな」と思いながらほほえんでいるという感じです。

★「息子の丸いおなかと短足」は *his plump belly and short legs* でいいと思います。「短い足」（事実表現）としないで「短足」とした日本語の感覚（かわいさ）は *shot legs* にはありませんが、これは仕方ないでしょう。

◆直接話を地の文に入れるのは日本語特有

「ほんとにかわいいな、と・・・」は、日本語特有の直接話を地の文にはめ込んだ文章です。ですから、それを生かして直接話法で、日本語通りにすると *He is really cute.* です。もうちょっと英語らしい言い方にするなら *Yes, he is really cute.* か *Yes, he is cute.* でしょう。しかし、英語では直接話法の文をそのまま地の文に入れることを避けます。したがって、間接話法で...*that he really was cute* です。ただ、よく、こういう場合、*rather* を加えて...*that he really was rather cute* とします。「親として、そんなこと言うのは何なんだけど」という感じです。日本人も昔は控えめが好きでした。イギリス人も同様に、「すてき!」「最高!」などとは言わなかったのです。「特売」も *rather special day* でした。映画『マイフェアデュー』の中でも控えめ表現が使われています。貧しい花売り娘イライザは言語学者ヒギンス教授によって発音を矯正され、上流階級のマナーも習得し、いよいよ舞踏会に出かけるため身繕いをして二階から降りてきます。それを見て、教授の友人のピクリング大佐は“*Not bad at all*”と言います。これ、最高の褒め言葉です。

★「・・・と（ながめたものです）」は「・・・と思いながら（ながめたものです）」ですから *think to myself that...* でしょう

★「ながめた」は *look at* でもいいのですが、ここでは「・・・と思いながらうっとりと見つめる」ですから *gaze* の方がぴったりです。

● {単位情報} の連結

{単位情報} の連結の観点から見ると、ここは「・・・言わ [れ]」は *and* でしょう。「かわいいな、と（思い [ながら]）ながめた」は「主動詞（ながめた *gazed*）＋句（思いながら *thinking*）」で処理できます。

■ところが六歳から七歳になる間に、すっかりおなかは引っ込み、足がひよろながくなり、サロペットを着せると、まるでかかしみたい。(8109)

★「ところが」は *But...* も使えますし、*However,...* も使えます。

★「六歳から七歳になる間に」は *between the ages of six and seven* でいいし、「間に」の「に」も表したいなら *somewhere [sometime] between the ages of six and seven* です。ここ

では while は使えません。while は一つの行為が続いていなければいけないのです。たとえば、While he was growing, we had to buy him new clothes many times. というように。

◆現在時制か、現在完了か、過去時制か

日本文は「六歳から七歳になる間に・・・になり、・・・を着せると、まるでかかしみたい」となっていて、ある一定の期間をイメージさせ、まるで今見ているような表現（まるでかかしみたい）を組み合わせる情景を vivid に描いていますが、英語にはこのような時制の使い方はありません。「一般に男の子は六歳から七歳になる間に・・・になり、・・・を着せると、まるでかかしみたいになる」というのなら一般論で現在時制、彼女の息子は六歳でまだ七歳になっていないなら今の状態を述べているのですから現在完了、彼女の息子はもう七歳になっているのなら過去時制です。ここは、もう七歳になっていて、「まるでかかしみたいだった」と読むのがまともでしょう。英語では過去時制を使うことになります。」

★「すっかりおなかは引っ込んだ」は his belly went [became] quite flat か、あるいは his belly flattened completely でしょう。

★「足がひょろながくなった」は「ひょろながい」という体全体のことを使う lanky という形容詞があるのですが、ここでも his legs became lanky と言えらると思います。手足が細いという意味の slender も使えるでしょう。

★「サロペットを着せると、まるでかかしみたい」ですが「サロペットを着ると」を強調して「まるでかかしみたい」と結果状態を述べるとするなら in rompers he like a scarecrow ですし、「着せると」という動作まで含めせるとしたら rompers make him look like a scarecrow でしょう。なお、like は省くことができますが、なんだか文学的で、日常会話なら必ず like を入れると思います。

■おまけに言うことまで憎らしくなる。(8109)

★「おまけに」は besides でもいいですし、what's more も使えます。なお、このような軽い随筆風な文章の場合は what is more とは書きません。what's more です。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(言うこと)

「言うこと」は「連体修飾節(言う)＋不定代名詞的体言(こと)」ですから「名詞(a thing)＋関係詞節(which he says)」です。ただし、ここでは「いろいろなこと」を含んでいるので the things he says です。

★「まで」は even でしょう。

★「憎らしい」は、ここでは「ちょっと驚くような痛いところを突くような」というニュアンスなら provoking (しゃくにさわる) がいいです。辞書には odious; horrible; spiteful などが出ていますが、odious は「いやな」という意味で、駄目です。horrible (ひどく不愉快な) は、もっと駄目です。spiteful は、面白がって相手を傷つけるようなことを言うような場合にしか使えません。

★「憎らしいことを言うようになる」と狭く解釈するなら come to say provoking things ですが、その言いぐさが憎らしいのですから even the things he says are somehow provoking

でしょうか.